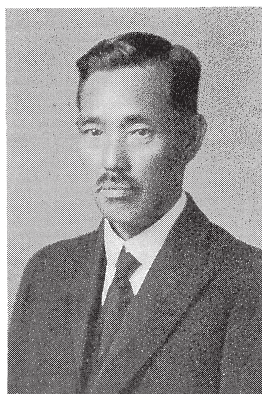


連載 へまつやま 人・彩時記④
幼児教育に大きく貢献した

フレールベル館創業者 高市次郎

元松山市立椿中学校長
伊予史談会会員 岩井 昭



フレールベル館創業者
高市次郎

一、幼児教育の先覚者

「キンダーブック」という絵本の名は、私の記憶の中に残っている。絵本の内容は覚えていないが、昭和の初期にこのカラー絵本を手にした思い出がある。多分、幼稚園で手渡されていたのであろう。

この「キンダーブック」を昭和二年から発行し、絵本を保育教材として初めて定着させたのが高市次郎である。

また、彼は、幼稚園遊具や玩具を売る専門店が日本になかった明治時代に、幼児の遊具・玩具を考案し、販売店をつくり、わが国の幼児教育に大きく貢献した人である。

二、愛媛から大志を抱いて

高市次郎は、明治九年一月十九日、愛媛県温泉郡小野村大字平井

谷（現松山市）に生まれた。明治

三十年愛媛県立尋常師範学校を卒業し、翌年、同村平井谷、香川熊太郎の妹カメと結婚した。香川熊太郎は、松山市八代市長として大いに活躍した人で、「香川熊太郎翁頌徳碑」（安倍能成書）が松山市三番町五丁目にある。高市次郎の事業にもよく力添えした人物である。

明治三十三年愛媛県新居浜村住友私立惣開尋常小学校訓導、同三十八年温泉郡素鷲尋常小学校（現松山市）訓導兼校長、同三十九年退職。このとき妻カメとの間に三人の子どもがおり、長男高市慶雄はのちに父の事業を引き継いだ。

高市次郎は、父祖伝来の家屋敷田畑を手離して、同三十九年に新しい世界を求めて上京した。

三、フレールベル館の創立

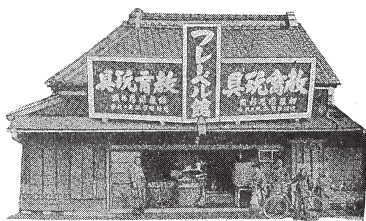
上京して神田区橋本小学校上席訓導となり、将来を嘱望されたが、意を決して一年で退職、身を幼児教育界に投じ、明治四十年、東京市麹町区飯田町四丁目玩具店白丸屋を開店した。

明治四十一年九段中坂上に移転し、日ごろ尊敬するドイツの偉大な教育者フリードリヒ・フレールベルの名前をとって「フレールベル館」と改称した。

創業当時、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事村五六、同園和田實等の指導、協力も得て、また、同校にあったフレールベル会の会員にもなり、保育用品の開発・製造・発売に努めた。

同館は玩具販売の商店であったが、玩具研究のために人々が集い、教育者の玩具研究機関のようになっていた。

和田實等が編集担当していた「婦人と子ども」（明治四十二年四月）によると、高市次郎はフレールベル館の創業について「フレールベル館は、現代に於て最も進歩せる幼児教育思想の普及を計り、兼ねて幼稚園教育の開祖たるフレールベル氏の徳を頌せんとする」と述べ



九段中坂上にあったフレールベル館
（明治41年4月～大正2年9月）

ており、幼児教育の先進的な存在となっていた。

四、すぐれた着眼・発案・経営力

高市次郎の友人横田惟精（愛媛師範学校の卒業生）の話が海南新聞（昭和十年八月二十一日）に掲載された。その一部を引用する。

「世間では、教員上がりの商売は士族の商法と同じく振わないものと相場を決めて居るが、高市君は機敏で、周密で、大胆で、商業学校の卒業生裸足という活躍を演ずるその一例として、模型飛行機材料販売に就いての話である。

日本でも飛行機熱が高まり、売行きが盛んになる傾向を見ると直ぐ、その部分品材料の販売を思い立った。

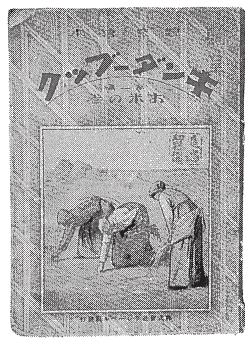
或る高等学校の学生が優秀な模型飛行機を作つて居ると聞いて、その学生を訪問し、その組立法を公表する許諾を得たので製作図を印刷し、材料を整えて居ると、たまたま明治四十一年、万朝報の主催で、早稲田で模型飛行機競技大会が行われた。前記学生の自作機は、当日の競技に群を抜く成績で、遙かに森の上を飛び越して行衛不明になった。無論一等である。

これを参観していた君は、直に附近の文具店で紙を買つと『今日の一等の飛行機の組立法と材料は、フレールベル館にある』と書い

て、出口、出口に貼っておいた。そして帰ってみると、店の前は黒山の人だかりで、準備した材料は忽ち売り尽くして、なお多くの予約注文を取った。……」

（かなづかい等は現代かなづかいに改めた）
このようにすぐれた着眼、行動力のもち主であった。

また、高市次郎は、人形の研究でも権威であった。代々木に工場を設け、ガラス工を雇い、人形の眼球の製造に着手した。そして、自らガラスを吹くという苦心のすえ、ついにドイツ式眼球の製造に成功、専売特許をうけた。さらに三年余り研究を重ねて、眠り人形（ドイツ式）の製造方法を完成した。



キンダーブック創刊号 (昭和2年11月)

昭和二十一年十一月、絵本キンダーブック（四六倍判三十二ページ多色刷定価五十銭）が、フレールベル館から発行された。

松居直直（日本基督教団出版局）は、著書「絵本・ことばのよろこび」（一九九五年六月発行）の中で「絵本が家庭に定着するのに決定

的な役割を果たしたのが、一九二七年創刊のキンダーブックという月刊絵雑誌です。キンダーブックは幼児向けの知識の絵本という、当時としては新しい編集方針を前面に打ち出しました。そして書店ではなく、幼稚園を通して家庭へ配布するといふまったく新しい販売体制をとりました。

キンダーブックは本格的な知識の絵本で、慎重に配慮された写真的な挿絵を使い、多様なテーマをとりあげている質の高い絵本でした。そして、ごく初歩的な科学教育の道をひらくとともに、幼児教育の場に絵本を保育教材として定着させました。現在でも日本の幼稚園・保育園・保育所では、日々の保育において絵本を子どもに読んでやり、子どもたちは毎月定期的に家庭へ月刊の絵本をもち帰り、親に読んでもらうことがほぼ習慣化していますが、それはキンダーブック創刊のころからはじまったことです。

一九三〇年代にはキンダーブックの発行部数は月約一〇万部という驚くべき部数でした。わたしも幼稚園児のころ、毎月家庭へ持ち帰りました」と述べている。

六、玩具・遊び中心の教育の提唱
昭和六年七月、米国デンヴァーで開催された第四回世界教育大会

に高市次郎は日本代表として出席した。二千名余の世界各国の代表に対して英文意見書「玩具による教育」を発表し、多大の感銘を与えた。その発表の中で、遊びを中心とする今日の幼児教育のあり方に通じる考え方を「合科教授」の呼び方で述べている。その発表の概要の一節を引用する。

「幼児は持つて生まれた活動本能を何等かの形において外部に発動せしめなくては一刻も生活することができないのであります。そして、この活動本能は遊びという形をもって外部に表現せられます。遊びは幼児の生活と密接不離な、否、幼児の生活そのものである、生活の全部であります」(フレールベル館七十年史による)と述べ、そして、幼児の興味とびつたり結びついた玩具の大切さをつづいて強調している。

七、教育者高市次郎

高市次郎のフレールベル館は、東京女子高等師範学校のフレールベル会会員や、その会の機関誌「婦人と子ども」の編集者和田實等、多くの人々の協力を得てその理想実現を図った。

そして、協力者の中に愛媛県師範学校関係者・卒業生が数多くおり、たとえば、曾根松太郎（高市次郎の師範時代の恩師）、前述の横

田惟精等をはじめ、愛媛出身者（愛媛県人会）からの信頼、支援、協力を得ることができた幼児教育の先駆者であった。また、妻の兄で松山市長をした香川熊太郎は、フレールベル館の役員もして尽力している。

昭和三十三年一月二十一日、高市次郎は八十一歳で死去。

その追悼のことばを「フレールベルだより」第二巻三月号で「その一生は幼児教育に対する激しい情熱をもって貫かれていました。人徳たかく、多くの人びとの尊敬をあつめていました。いま、この偉大な先覚者を失って私たちは悲しみにたえません」と述べている。

また、愛媛県史人物編には、高市次郎を教育者と記している。まさにわが国の幼児教育に大きな業績を残した教育者といえよう。

※高市次郎は、昭和十二年にフレールベル館の社長を長男高市慶雄にゆずって自適生活に入った。

昭和二十年の戦争終結後、高市慶雄は、フレールベル館のすべての経営から引退し、発田栄蔵に社長を譲渡し、間もなく四十九歳で死去している。

主な参考文献・資料

フレールベル館七十年史

（写真はフレールベル館七十年史より）

海南新聞記事（昭和十年八月二十一日）

「絵本・ことばのよろこび」松居直直著 愛媛県史（人物編）